目次

編集にあたって　姜尚中

巻頭言　古井龍介

凡例

アジア各地の神話

西アジア神話　月本昭男
古代メソポタミアの豊穣な神話世界……004

インド神話　横地優子
叙事詩と神話のカップルたち……029

中国神話　牧角悦子
中国古代史の再構成……047

朝鮮神話　野崎充彦
檀君――朝鮮史が生み出した民族神……071

日本神話　坂本　勝
記紀神話から無文字時代の古層を掘る――大国主神話をめぐって……091

中央アジア神話　坂井弘紀
テュルクの口承文芸から……110

東南アジア神話　北川香子
カンボジアの建国神話……130

第1章　バビロン王ハンムラビの野望　柴田大輔

はじめに……155

ハンムラビ（在位前一七九二〜前一七五〇）……159
ハンムラビの即位／ハンムラビの前半生／サムシ・アッドゥ大王の死とエシュヌンナ軍の猛攻／エラム大帝の侵略／ハンムラビの大征服／ハンムラビの晩年――『ハンムラビ法典』に込めた人生の総括／ハンムラビの領土統治／後代におけるハンムラビとその『法典』
サムシ・アッドゥ大王（在位前一八三二頃〜前一七七五）……176
ジムリ・リム（在位前一七七五〜前一七六二）……179
タラム・クビ（前一九世紀）……182
その他の人物……184
エシュヌンナの知事・王たち／イシュメ・ダガン王／リム・シン王／アタムルム

第2章　アケメネス朝ペルシア帝国を完成せし王

阿部拓児

はじめに……191
ダレイオス一世（前五五〇頃〜前四八六）……194
一、ダレイオスの即位にいたる経過　史料状況／王位にのぼるまで／僭称王か、それとも「代理王」か？／「反乱」の危機を越えて／「アケメネス朝」はいつ始まったか／婚姻による正統性の確立
二、ダレイオスによる国内整備　サトラプ制の整備／「王の道」――交通インフラの整備／古代ペルシア文字の考案／「造る王」によるペルセポリス建都
三、ダレイオスによる領土拡大　インド遠征とリビア遠征／北方遊牧民にたいする遠征／ギリシア遠征（ペルシア戦争）／ダレイオスの最期／死の準備／帝国の膨張とペルシア王の宿命
キュロス二世（在位前五五〇年代初頭？〜前五三〇）……223
カンビュセス二世（在位前五三〇〜前五二二）……225
アトッサ（前五五〇〜前四七五頃）……227
クセルクセス（在位前四八六〜前四六五）……228
ヘロドトス（前四八四頃〜前四二〇年代？）……231
クテシアス（前四四〇頃〜？）……232
その他の人物……234
ゾロアスター／アステュアゲス／クロイソス／ナボニドス／アマシス／カンビュセスの弟X／僭称王Y／六人のペルシア人貴族／スキュラクス／ペレティマ／アルタプレネス／アリスタゴラス／マルドニオス／ダティス／ダレイオス二世／パリュサティス／アルタクセルクセス二世／ダレイオス三世／アレクサンドロス三世（大王）／アルサケス一世／ミスラダテス二世／アルダシール一世／シャープール一世／ゼノビア／ローリンソン兄弟／モハンマド・レザー・パフラヴィー

第3章　ナザレのイエスと信仰のイエス・キリスト　月本昭男

はじめに……249
イエス（前五前後～後二八前後）……250
イエス時代のガリラヤ／イエスの生涯／イエスの思想と行動／イエスの「復活」

第4章　ブッダ――〈所有〉と〈再生産〉の社会に現れた覚者　馬場紀寿

はじめに……259
ブッダ（前四四八頃～前三六八頃／前五六六頃～前四八六頃）……261
一、ゴータマ・ブッダの生涯
二、仏教の二重構造
三、〈所有〉と〈再生産〉に基づく生への批判
四、高貴な道
五、アジアにおけるブッダ観

第5章　アショーカ　ある帝王の生と死後生　古井龍介

はじめに……275
アショーカ（在位前二六八頃～前二三二頃）……278
一、アショーカの「生」　碑文が語る「生」――アショーカ自身によるアショーカ／カリンガ征服の帰結――仏教への傾倒とダルマの政治／アショーカのダルマ／アショーカと仏教／晩年
二、アショーカの「死後生」　記憶と忘却／理想の仏教王／再発見から新たな理想像へ
サムドラグプタ（在位三五〇頃～三七五頃）……301
ジェイムズ・プリンセプ（一七九九～一八四〇）……302
その他の人物……304
ビンビサーラ／アジャータシャトル／マハーパドマナンダ／アレクサンドロス三世（大王）／チャンドラグプタ／

セレウコス一世ニカトール／メガステネース／ビンドゥサーラ／
アンティオコス二世テオス／プトレマイオス二世フィラデルフォス／
アンティゴノス二世ゴナタス／マガス／アレクサンドロス二世（エピロス王）／
ルドラダーマン一世／法顕／玄奘／フィールーズ・シャー・トゥグルク／
梁武帝／隋文帝／武則天／銭弘俶／ジャワハルラール・ネルー／
モーハンダース・カラムチャンド・ガンディー

第6章　悠久の時を超える古代中国の思想　湯浅邦弘

はじめに……313
孔子（前五五一～前四七九）……316
一、孔子の生涯　俎豆を陳べて礼容を設く／三月、肉の味を知らず／少正卯を誅す／受難の旅／夢に周公を見ず
二、神秘の伝承と神格化　祀られる孔子／素王伝承／偉業達成の祝福／感生帝説
三、「孔子以前」はあったのか　出土した故事集／王権に対する訓戒の書／無名の説話からの飛躍
四、思想体系と弟子門人たちによる展開　「仁」と「孝」／社会秩序としての「礼」／孔子の思想の展開
五、諸子百家との対峙　儒墨の対立／出土文献に見る儒墨の関係／諸子百家の中の儒家
六、『論語』の編纂と流布　弟子門人たちの著述活動／『論語』はどのように編纂されたのか／発見された「斉論語」
七、今に生きる孔子
老子（生没年不詳）……348
孟子（前三七〇頃～？）……350
荀子（前四世紀末～前三世紀後半）……353
墨子（前四八〇頃～前三九〇頃）……356
屈原（前三四三頃～前二七七頃）……358
その他の人物……361
顔回／宰我／子夏／子貢／子思／子張／子游／子路／冉求／冉耕／冉雍／
曾子／閔子騫／堯／舜／禹／周公旦／子産／荘子／商鞅／韓非子／公孫龍／
孫子／呉起／鬼谷子／蘇秦／張儀／鄒衍／桓公／文公／荘王

第7章　中国最初の皇帝の人間像　鶴間和幸

はじめに……377

始皇帝（前二五九～前二一〇）……382
始皇帝の生涯五〇年の辿り方
一、王政時代（前二四七～前二二二）　嬴姓趙氏／嬴政か趙政か趙正か／嬴姓の消滅と秦氏／若き秦王の試練――合従軍の侵攻／嫪毐の私乱の真相／母の母国趙への復讐／秦王暗殺未遂事件／荊軻自身の復讐
二、帝政時代（前二二一～前二一〇）　社稷と宗廟の加護／対六国戦争の正当化／李斯の戦争論／第一回巡行（始皇二七・前二二〇）／第二回巡行（始皇二八・前二一九）／第三回巡行（始皇二九・前二一八）／第四回巡行（始皇三二・前二一五）／第五回巡行（始皇三七・前二一〇）／永遠の死――結びに代えて

呂不韋（?～前二三五）……415
李斯（?～前二〇七）……416
趙高（?～前二〇七）……419
項羽（前二三二～前二〇二）……421
劉邦（前二五六～前一九五）……423
その他の人物……427
昭王（昭襄王）／孝文王／荘襄王／成蟜／夏姫／帝太后／扶蘇／胡亥／子嬰／蔡沢／甘羅／昌平君／昌文君／嫪毐／韓非／鄭国／李信／王齮／麃公／楊端和／桓齮／羌瘣／騰（南陽仮守騰／内史騰／南郡守騰）／李牧／龐煖／王翦／王賁／王離／蒙驁／蒙武／蒙恬／蒙毅／項燕／隗状／王綰／馮劫／馮去疾／馮毌択／徐市／盧生／章邯

第8章　**遊牧国家の君主はこうあらねばならぬ**
――冷酷にして寛大、先読みは鋭く　林　俊雄

はじめに……445
冒頓単于（?～前一七四）……448
一、匈奴と秦の対立
二、騎馬遊牧民が大河を渡る方法
三、頭曼という名前について
四、単于の奥方
五、月氏の人質となる
六、冒頓のクーデタ
七、東胡に示す「隣人愛」
八、「土地は国の本」
九、月氏を駆逐し、楼煩白羊河南王を併合する
一〇、河南と北方を制圧
一一、劉邦との直接対決へ
一二、白登山の戦い――古代世界最大の会戦

一三、会戦は意外な展開に
一四、陳平の「祕計」
一五、和親条約の中身――公主降嫁と現物供与
一六、贈り物の量はどれくらいか
一七、どのように運んだのか
一八、冒頓の死

劉邦（前二五六～前一九五）……485
呂后（前二四一？～前一八〇）……488
韓王信（？～前一九六）……492
中行説（生没年不詳）……495
趙信（生没年不詳）……498
その他の人物……501
張騫／范夫人／王昭君／盧綰／蘇武／衛律／李陵／李広利

第9章 『史記』の通史と世界史の創造

藤田勝久

はじめに……509

司馬遷（前一四五／前一三五～前八七頃）……513
一、父・司馬談と司馬遷の著述――古代中国の歴史　漢王朝の成立と社会／武帝と司馬談の著述（元封元年まで）／司馬遷の仕官と著述（太初年間まで）
二、漢王朝と諸民族――東アジアの世界史　遊牧国家・匈奴の情報／漢と匈奴との戦争――衛青の活躍／張騫の帰国とシルクロードの開通／匈奴との戦争の拡大――霍去病の死／司馬遷と西南夷の認識／東越、南越の世界／朝鮮四郡の設置――世界史の創造
三、李陵の禍と『史記』の完成（征和年間まで）　李陵の弁護／中書令と著述の変化／武帝の晩年と司馬遷／『史記』の編集と歴史観――どのような書物か
四、古代中国と東アジアの世界史　未来に伝える『史記』の歴史／『史記』の世界史とその影響

武帝（劉徹）（前一五六～前八七）……549
司馬談（？～前一一〇）……551
班固（三二～九二）……553
その他の人物……556
ヘロドトス／文帝（劉恒）／賈誼／董仲舒／公孫弘／司馬相如／壺遂／李広／衛青／霍去病／陸賈／路博徳／楊僕／荀彘／李陵／任安／李広利

第10章　儒教王権の誕生

渡邉義浩

はじめに……567

王莽（前四五～二三）……573
一、周公という理想　王莽の台頭／周公を理想に／周公の故事／九錫を受ける／古文学と劉歆
二、『周礼』国家　王莽の即位／儒教経義と国制／『周礼』の尊重
三、「古典中国」の基本　古典的国制の形成／古典的国制と古文学／王田制／理念の帝国／王莽の孤立／政策の撤回／赤眉の乱／王莽と儒教王権

董仲舒（前一七六頃～前一〇四頃）……604

劉向（前七九～前八）……607

劉歆（前三二頃～二三）……609

光武帝（前六～五七）……612

章帝（五八～八八）……614

鄭玄（一二七～二〇〇）……616

その他の人物……618
元帝／王政君／明帝／班超／甘英／班固／許慎／馬融／張角／張陵

第11章　伝統から革新へ
――後漢末の混乱と「乱世の奸雄」の登場

牧角悦子

はじめに……623

曹操（一五五～二二〇）……625
虚像と実像
一、実権掌握直前の回想　後漢という時代の中で「大将軍に為ろう」とした／実権掌握の過程を振り返る／後漢的価値からの脱却
二、第一期　大将軍たらんとす『三国志』「武帝紀」／宦官と外戚／清流と濁流／士名を得る／治世の能臣、乱世の奸雄／楽府「短歌行」
三、第二期　後漢末の混乱と群雄割拠　黄巾の乱と後漢の衰退／董卓の討伐／袁氏兄弟との対立と官渡の戦い／赤壁の戦い
四、第三期　実権掌握の過程　「求賢令」二一〇年（建安一五）／漢魏革命の予感／魏公となり九錫を授けられる／社稷と籍田／魏王に爵せられる／終令と最晩年／史書の評価／『三国志』「武帝紀」評
五、曹操と儒教、曹操と文学　曹操と儒教／曹操と文学

曹丕（一八七～二二六）……681

曹植（一九二～二三二）……682
その他の人物……684
諸葛亮／孫権／劉備／関羽／曹騰／曹嵩／橋玄／孔融／禰衡／陳琳／王粲／司馬懿

第12章 前イスラーム時代における中央アジア勢力の南アジア進出

宮本亮一

はじめに……691
カニシュカ一世（二世紀）……694
クシャーン朝前史／クシャーン朝の勃興と発展／カニシュカ一世の虚像と実像／カニシュカ一世後のクシャーン朝
トーラマーナ（生没年不詳）／**ミヒラクラ**（生没年不詳）……706
サーサーン朝の東方支配とフン系集団の登場／アルハンの南アジア侵出／トーラマーナとミヒラクラ／人間集団の移動と在地社会との関係
インド・スキタイ（前一世紀頃～一世紀中頃）……718
インド・パルティア（一世紀前半～二世紀初頭頃）……720
クジュラ・カドフィセス／**ヴィーマ・タクトゥ**／**ヴィーマ・カドフィセス**……721
サータヴァーハナ朝（前一世紀頃～三世紀）……723
キダラ（四世紀末／五世紀初頭～五世紀後半）……725
エフタル（五世紀中頃～六世紀中頃）……727
その他の人物……730
アシュヴァゴーシャ（馬鳴）／ヴァースデーヴァ／烏孫／ディオドトス／西クシャトラパ／フヴィシュカ／メナンドロス一世／アフガーン／カワード一世／キオニタエ／グルジャラ／シャープール二世／柔然／スカンダグプタ／鮮卑／宋雲／チャンドラグプタ二世／吐谷渾／ナルセフ／ネーザク／ワフラーム五世／ハラジュ／プラカーシャダルマン／ヤショーダルマン／ペーローズ一世／ヤズデギルド二世

第13章 東南アジアの初期国家とインド化

青山亨

はじめに……747

趙佗（?～前一三七）……752
ハイバーチュン――チュン・チャク（?～四三）／**チュン・ニー**（?～四三）……754
范師蔓／范旃／范尋／竺旃檀……756
カウンディンヤ（生没年不詳）……758
ムーラヴァルマン（在位四〇〇頃）……760
プールナヴァルマン（在位五世紀初頭）……762
その他の人物……766
ピュー／モン／武帝（劉徹）／士燮／マルクス・アウレリウス・アントニヌス／雍由調／康泰／朱応／チャム／バドラヴァルマン
執筆者一覧
写真提供・図版出典

凡例

・本書の構成は、章ごとにまず中心となる人物について述べ、次いで当該人物を取り巻く重要人物について、さらに関連する人物について、項目を立てて述べている。ただし、例外的にこの構成を採らない章もある。
・本文中、その章で項目を立てた人物名等の初出に「▼」を付した。
・漢字表記については、原則として常用漢字を用いた。
・人名および地名等については、平凡社の『世界大百科事典』、《エリア事典》シリーズ、岩波書店の『岩波イスラーム辞典』『古代オリエント事典』、その他の各種事典類を参照しつつ適宜検討し、採用した。
・ふりがなについては例外を除き、日本と中国の人名および地名等については日本語の読みによるひらがな表記、その他の漢字圏の人名および地名等については現地音によるカタカナ表記で付した。
・外国語文献の日本語訳については、特に断りのないものは執筆者による。また、日本の古典籍等については執筆者により適宜読みやすく整理した場合がある。
・引用文中の執筆者の補注については原則として［　］を使用した。
・年代は原則として西暦（新暦）表記とした。月日については、西暦採用以前の東アジア地域では旧暦のままとした章もあるが、それ以外の地域については、特に断りのないものは西暦表記とした。
・イスラーム圏におけるヒジュラ暦等、西暦への換算にあたって二年にまたがる場合、原則として下一桁を「／」でつなぎ表記した（「一四〇〇／一年」等）。
・人物の満年齢と数え年については執筆者の表記を尊重した。